

虫送りの1日【富奥地区】

準備



火文字のアーチの製作です。
縄は、事前に油に浸しておき、当日火がまわりやすいように工夫しています。



虫送り会場の大かがり火となるやぐらを組み立てます。骨の組み立てが終わると稲わらをつめ、着火の準備をします。

太鼓の練習



1か月ほど前から太鼓の練習をはじめます。その集落の年上の人々が子供たちに太鼓のリズムを伝え、受け継がれていきます。

平成28年度 富奥地区虫送り大会



富奥地区では、14の集落がそれぞれ神社から出発し、高張提灯を先頭に、若い衆の担ぐ太鼓(道中太鼓)、子供達の松明の行列が続きます。(写真は上新庄集落)



道中の小公園などで、かがり火がたかれ、太鼓を打ちます。この時に子供達にはアイスが配られます。昭和のはじめの頃にもすでにアイスが配られていたそうで、当時の子どもたちの楽しみだったそうです。



夜8時前、各集落が提灯と太鼓を先頭に広場の前に続々と集まります。「虫送り」の火文字のアーチに点火されると、大かがり火をめがけて広場に突入します。



14集落が大かがり火の周りを囲み、太鼓の競演がはじまります。同時に、大かがり火に点火がされ、20分ほど大きな炎が燃え上がり、一日で一番の盛り上がりを見せます。



ちなみにこの年は約2000人が集まったんだって!



火が消えた後は、ふたたび道中太鼓を鳴らしながら、各集落に帰っていきます。また、子どもたちは相撲大会に参加します。虫送りの日に相撲をとることは、かつては近隣の地域ではどこでも行っていました。現在の富奥地区では子ども相撲として今でも受け継がれています。

